

二 善徳寺の歴史・沿革

北陸は浄土真宗と大変かかわりの深い地域である。その由緒は承元元年（一二〇七）の親鸞の越後配流といわれており、越前・加賀・越中の真宗寺院で、配流の途中で教化があつたという伝承が、少なからず伝えられている。

文明三年（一四七一）、蓮如は越前の吉崎より金沢を経て井波瑞泉寺へ赴く際、祖父巧如の弟、周覺法印が布教した旧地である加越国境の砂子坂（金沢市）を訪ねた。そして、その仏法有縁の地に道場を創建するように諭し、周覺の孫で蓮如の甥、蓮真に付属させた、と伝えられている。これが善徳寺のはじまりとされており、このことから善徳寺では蓮如を開基とし、蓮真を第二世としている。その後、蓮真は寺基を砂子坂から法林寺（南砺市）に移し、子の実円に跡を譲つた。延徳期（文亀期）（一四八九～一五〇四）には、法林寺から山本（南砺市）に移り、このころ、本願寺九世実如より寺号「善徳寺」を免許された。

実円の子である第四世円勝は、天文年間（一五三一～五五）に福光（南砺市）へと移り、さらに、円勝の子、第五世祐勝のころ、城ヶ鼻の城主、荒木大膳の請をうけ、現在地である城ヶ端の城郭に寺を建立したと伝えられている。その時期については、諸説あるが、通説では永禄二年（一五五九）といわれている。祐勝には男子がなかつたため、越前の西光寺から空勝を婿に迎え、第六世とした。

空勝は、本願寺と織田信長が戦つた石山合戦（一五七〇～一五八〇）に参戦し、加越能の門徒に兵糧や鉄砲、五箇山塙硝を調達させるなど、大きな活躍をみせた。合戦講和後、顯如は石山を退去するが、子の教如は講和に反対し、しばし籠城を続けた。この時、越中の有力寺院のうち井波瑞泉寺と伏木勝興寺は顯如を支持したが、空勝は教如方についた。

慶長八年（一六〇三）、教如が東本願寺を開創し、本願寺の東西分派がおこると、空勝は教如へ帰参した。この結果、善徳寺は越中において東方の最有力寺院として地位を確立し、越中・加賀・能登の三か国に末寺、門徒をもつ中本山としての役割を果たすようになった。

また、天正二三年（一五八五）には、越中三郡は前田氏が領有することになった。

延宝七年（一六七九）成立の『由来覚書一牒』や嘉永二年（一八四九）に成立した『城端善徳寺由緒略書』によれば、慶長九年（一六〇四）に、加賀藩二代藩主前田利長が狩りの途中、善徳寺に二泊し、拝領品とともに自筆の屋敷地寄進書状を下されたと記されている（普請関係史料抄 史料二）。

加賀藩は、寺社政策として慶安四年（一六四八）に寺社奉行を置き、ついで、宗派ごとに頭寺（触頭）を定めることとした。

本願寺は宣如の意向によって寺法に関する「申触」を、善徳寺と慶安二年（一六四六）に東方へ帰参した井波瑞泉寺の二か寺に伝達することとし、これに倣い、加賀藩もこの二か寺に「頭寺（触頭）」を伝達することとした。これ以降、善徳寺と瑞泉寺が国法・寺法の両法について、越中四郡の東方二七二か寺の頭寺となる体制が確立した。

この後、近世中期の善徳寺は、歴代住職が本願寺宗主親族から就任しており、寺勢の安定期を迎えて、本堂造営や鐘楼の竣工など大事業が行われ、御坊としての地位を確立した。

しかし、第一五世真応（本願寺一六世一如の孫・一七九一年没）の没後、なかなか後継が決定しなかつた。加賀藩三代藩主前田斉泰は、嘉永元年（一八四八）に誕生した一〇男の亮五郎について善徳寺入寺の意向を表した。亮五郎は本願寺二〇世達如の猶子となり、名前を亮磨と改め、嘉永二年（一八四九）に第一六世住職として入寺した。亮磨は入寺後も、藩主実子として藩からの援助を受けていたが、嘉永四年（一八五一）に四歳で没した。その後、明治四年（一八七一）には、亮磨の妹、治姫が第一七世巖高の室に縁辺相整い入輿するなど、前田家との関係は保持している。

近世後期の善徳寺は、住職が決定しない時期が長くあつたが、五か寺と呼ばれる五つの下寺（真覚寺・恵林寺・伝榮寺・龍勝寺・淨念寺）が寺務や儀式に深くかかわり、善徳寺を運営していた。五か寺は、寺家、役僧、列座、寺中、看坊、役寺とも呼ばれ、住職が在中のときは役僧として働き、住職が留守、または、無住のときは看坊として、寺法と国法の二つの事務やさまざまな案件の取りさばきを行つた。

明治期に入ると、六年（一八七三）に「御坊」が「管利」に改称され、城端管利となつた。また、九年（一八七六）には「宗規綱領」により「管利」が「別院」と改称され、現在に至つてはいる。

